『自負と偏見』

――自己発見の意味――

河村昭夫

一

オースティン（Jane Austen, 1775-1817）の『自負と偏見』（*Pride and Prejudice*, 1813）は単純に見れば一種のシンデレラ物語に過ぎない。話の中心は、平凡な地方の小地主ベネット氏（Mr. Bennet）の五人娘の上の二人にかかわる恋愛話である。長女ジェイン（Jane）は近くの荘園主として引越して来たビングリー氏（Mr. Bingley）と、そして次女エリザベス（Elizabeth）はビングリー氏の友人の若い貴族で、広大な土地と宏壮な館の持主であるダーシー氏（Mr. Darcy）と、それぞれ恋愛の末めでたく結ばれる。その意味では、この小説も当時読者大衆に持て囃されていたロマンス調の恋物語の要素を多分に受け継いだものだといえるかも知れない。

だが、作者オースティンの皮肉で、鋭い観察の眼は、主人公達が結婚するに至るまでの紆余曲折が、単なる外面的、偶発的事情によるものでないことを見抜いている。彼等の複雑な性格と心理の絡まりが、結婚への最大の障害となっていることを見逃さない。そして、その性格と心理が、それぞれの人間関係を通して、微妙な変化を見せていく様子を見事に分析してみせる。この小説が単なるロマンス調の物語にはない近代性を具えている大きな理由はそこに

ある。

作者の眼に映る人間の姿はまず一様に愚かしい。それらは、「多感」がゆえに生じる誤解であり、ロマンテックな夢を追うがための誤りであり、また、上流気取りのスノビズムであったりする。そして、この小説で、作者は「自負」と「偏見」に囚われた主人公達の愚かしさに眼を向ける。迷夢をいだき、誤った判断と行動を繰り返す彼等は、やがてそのことに気づき、分別を取り戻す。素直な観照態度で、自分とその周辺を見つめなおす人間に変貌した彼等は、お互いの素顔を見出し、その本心を知って、幸せに結ばれるのである。このように、幸福実現のための前提としての「自己発見」が、この小説の重要な主題となっていることは周知の通りであるが、ここで、この「自己発見」の主題が含む意味を、エリザベスを中心に考えてみよう。

二

オースティンの小説すべてに共通することだが、登場人物が活躍する世界はまことに小さくて、狭い。この『自負と偏見』でも、話の舞台は、時にはロンドンやダービシャ（Derbyshire）にあるダーシーの荘園などに移るが、そのほとんどはロンボーン（Longbourn）のベネット家とネザフィールド・パーク（Netherfield Park）のビングリーの館が舞台となる。南イングランドの田園の一隅にあって、およそ世間から切り離されたような小さな世界。そこでは、いささか浮世ばなれしたような人達が、恋をしたり、失恋したり、近隣の噂話に喜んだり、悲しんだり、悩んだり――いわゆる「コップの中のあらし」を繰り返しながら、小じんまりと平和な日々を楽しんでいる。そんなところへ、「財産持ちで、独りものといえば、あとは細君をほしがるにちがいない」という「世間公認の真理」（一巻・一章）[1]を絵にかいたような男達が闖入してきたことから、この小世界の喜劇が始まる。

肝心の結婚相手の気持や考えにおかまいなく、娘達には絶好のチャンスとばかりにベネット夫人(Mrs. Bennet)が活躍しだすので、五人の娘達、中でも主人公エリザベスの人生は予想もしない展開をみせる。彼女は「活発で、茶目っ気のある気質の持主」(一巻・三章)で、人の気紛れや矛盾、馬鹿らしさが眼につくと、面白がってついそれを笑いの種にしたくなる、という陽気な娘である。そんな彼女が、知的で冷静ではあるが、自負心の権化のようなダーシー相手に恋の駆け引きをやってみせる。というよりも、メアリアン(Marianne)やエマ(Emma)[2]達と同様、エリザベスも、ダーシーとのかかわりの中で、偏った第一印象から生じる自分の判断の誤りに気づき、素直に自分の気持を見詰めなおすことで、いつとはなしに相手に引かれている自分を発見し、やがてダーシーの愛情を受け入れるのである。

『自負と偏見』というこの小説のタイトルが、ダーシーとエリザベス二人の、それぞれ誤解から解放される以前の姿を表わしていることはいうまでもない。富裕な貴族の当主であるダーシーが、その社会的背景を誇る気持から、猥雑な世間——殊にロンボーンやその周辺の人達を見下す態度を見せたとしても不思議はない。その男にパーティで初めて出会ったエリザベスは、頭がよくて、観察力の鋭い「人の性格の研究家」(一巻・九章)である。その彼女の眼には、ダーシーがいかにも高慢ちきな嫌らしい男に映る。しかも、彼女は、「私には強情なところがありましてね、他人様の意向におじけづいたりは決していたしませんわ。私をおどかそうとなさればなさるほど勇気が出ますの」(二巻・八章)といい放つ勝気な女である。ダーシーについての印象が好ましくないのは当然のことである。その上、かなりの悪(わる)であるウィッカム(Wickham)——最初彼女自身心憎からず思っていた男性——から誤った情報を吹き込まれ、その印象は否められ、ますます「偏見」を強めていく。

だがエリザベスにも自負心はある。たとえば、姉の病気の報せを聞いて、健気にもビングリー家まで三マイルの泥道を物ともせず、なりふりかまわず歩いて出かけていく。また、湖沼地方への旅の途中、都合で切り詰めた旅に変更せざるを得なくなったときも、「なにでも満足するのがつとめで——くよくよしないのが彼女の気質であった」(二

巻・一九章)。このような勝気で意地っぱりな気質は、明らかに、自分で考え、自分で行動する積極的な女のそれである。エリザベスがそんな自分を自覚して、彼女なりの自負心を心に抱いていることは十分考えられる。

一方、「自負」の権化のようなダーシーもやはり「偏見」に陥ることは免れない。高い社会的地位や育ちからくる自負心ゆえに、ついつい高慢な態度を取り、他を見下す弊に陥ることは人間の常である。初めてネザフィールドで催された舞踏会で、背丈の高い、ととのった眼鼻立ちで、上品な物腰、しかも年収一万ポンドと噂される彼は、集った人々の関心を一身に集める。だが、たちまち、「高慢ちきで、気取り屋で、まったく我慢ならない」(一巻・三章)人物として、ベネット家の母娘の反発を買う。「眼から鼻へ抜けるようなところがある」が、同時に「傲慢で、人づきあいが悪く、気難しい」(一巻・四章)この男の、一座を見下げたような態度にも、エリザベスのそれとは異質のものではあるが、「偏見」を認めることができる。そして、彼は、エリザベスから手痛い求婚拒絶を受けるまで、この「偏見」の誤りに気づかないのである。

こうしてみると、表題の「自負」と「偏見」は単にダーシーとエリザベスの一面を表わすだけではない。結局、何か事に囚われて、冷静な判断力に欠ける人間は、えてして「自負」と「偏見」を合せ持った愚かしい存在にならざるを得ないということであろう。作者はこの人間の弱点を、エリザベスとダーシーという人物でもって示そうとした。そして二人が、誤った判断、歪められた印象に振り回されたあげく、次第にその「自負」と「偏見」の迷いから解放されていく経緯を、鋭い批判の眼で眺め、おかしく描いていったのである。

三

物語の中心となる二組の恋人達は際立って対照的である。ビングリーの相手となるジェインは気のやさしい女で、

常に控え目な態度をとる。「……見栄でもなければ、わざとでもなく素直で――人の性格のいいところだけ見て、しかもそれをより一層よく見てやって、悪いところについては何一ついわない……」（一巻・四章）と妹から批評されるジェインの人の好さは、いかにも彼女の持ち味ではあるが、情熱に欠ける憾みがある。ダーシーにはそれが不満なのである。たしかに彼女はビングリーには似つかわしい相手であろう。だが、結局ダーシーは、「……なるほど、あの方はビングリー君の好意を喜んで受けておられるが、積極的な気持でそれを求めてはおられなかった。……お姉さまの静かな表情と態度は……愛想はよいが、心は容易に動きそうにもない、と思わざるを得ない」（二巻・十二章）と判断する。これでは、二人が社会的地位の差――十万ポンドの遺産相続人と年収二千ポンドの家の娘――という障害を乗り越えて、結婚に踏みきるには不十分だと彼は考えるのである。そこで、結婚後の様々なトラブルを予想して二人の仲を裂こうとする。

一方、エリザベスはどうか。先に見たように、彼女は陽気で、茶目っ気のある、行動的な女である。他人が嵩にかかってくると、いやでも反発して皮肉の一つもいってみたくなる勝気なエリザベスは、高慢な態度をみせるダーシーを前にして、俄然闘志を湧かせる。あるいは、地位門閥を笠に着て、尊大無礼な口をきくキャサリン・ドゥ・バーグ夫人（Lndy Catherine de Bourgh）に、物怖じするどころか、真向から堂々と反論する。

「じゃ、どうでもあの子をものにしてみせるおつもりなのね」

「なにもそんなことは申しませんわ。ただ、私は、自分の考えで、自分が幸せになれると思うようなやり方でやっていくつもりでいるだけですの。奥様や、自分となんの関係もない人のことなど構っておりませんのでね。」（三巻・一四章）

では、義理も、体面も、恩義も、一切考えないのか、と夫人が問いつめると、

「ともかくこの場合、義理も、体面も、恩義も、私にはなんのかかわりもございません。かりに私がダーシーさんと結婚したとしても、別に義理や、体面や、恩義になに一つ不都合なことはありませんでしょう。それに、あの方の身内がお怒りになると

か、世間が許さないとかおっしゃいますが、もし私と結婚したからといって、身内の方がお怒りになっても、私はこれぽっちも気にいたしませんし――それに世間というものは一体に、とても物分かりがよくって、ちっとも笑ったりなどいたしませんわよ。」（三巻・一四章）

この鋭い舌鋒には、社会的地位などの既成の概念に捉われず、自分の思いのままに語り、行動する自立した女の強さがよく現われている。しかも、このような気儘な行動をするにもかかわらず、彼女が読者の好意を引く魅力的な人物に描かれている点に、作者のこの人物に対する深い愛着が感じとれる。

見方によれば、エリザベスは当時のイギリスの、それも地方の旧弊な社会の枠からはみ出た女であったとも考えられる。利発な彼女は、社会の枠組、階層差の存在を無視しての結婚が、様々のわずらわしい問題を引き起すことに気づいている。だが、彼女は敢えてそれを無視した行動をとる。相手にも、その枠を離れて、一個の人間としての自然な態度をとることを要求し、また人間としての自然な愛情を示すことをせまる。恋しい女性からこのようにせまられては、ダーシーも妥協せざるを得ない。妥協して、自分の地位の高みから一歩降りることによって、彼女の愛を得る。こうして二人はそれぞれの社会の枠を離れて、お互いを一人の人間として見直すとき、はじめて、素直な、より人間的な愛情を見出すことができるのである。

こうした二人の結び付きは、保守的な階層意識がいまだに強く残っていた十九世紀初頭の地方社交界では、かなり世の中を先取りした、進歩的な行動と受けとられたと見てよいだろう。また、当時の読者は、エリザベスの中に、ロマンスの主人公とははっきり袂を分かち、自分でものを考え、自分の判断に頼って行動する近代性を身につけた新しい女を見出したことは十分想像される。この点に注目して、作者の進歩性を説く批評家もいる。[3] だが、南英の田舎から、小世界を舞台とする一連の小説を世に送った作者自身、はたしてこの点について、どのような意識を抱いていたのだろうか。

四

オースティンにはファニー（Fanny Knight）という姪がいた。利発であるが、勝気なところなど、作者の気質と共通するところがあったためか、彼女はこの姪に特別目を掛けていたようである。ある時、ファニーが、身分も人柄も申し分のない男性から結婚を申し込まれた。本人は、相手に対する愛情と、結婚したい気持との区別がつきかねて、作者の助言を求めてきた。それに手紙で答えて、

――ところが、確かにあなたは恋をしていません――それは隠しようもないことです。――私たち人間は何と不思議な存在なのでしょうね！――（あなた自身がおっしゃるように）あなたが彼をものにしたと思った途端に、あなたは彼に無関心になってしまったようですね。……それにしても、あなたの気持がかほどまで大きく変るとは、私もただただ驚くばかりです。[4]

といって、彼女の恋が若者の陥りがちな錯覚であること、しかも、すぐさま気持が変った彼女の気紛れぶりを、優しく皮肉りながら戒める。そして、人柄といい、身分といい、申し分のない相手だから、考えなおしてはどうかと忠告している。ただ、姪の性質を知り抜いている作者は、気遣って、「……あの方が本当に好きでないかぎり、これ以上の態度に出たり、申し出をお受けしようなどと思わないで下さいね。愛情のない結婚にくらべれば、どんなことでも望ましくなりますし、我慢できるものです」[5]と、結婚には愛情が不可欠であることを説いて聞せている。

十二日後の手紙でも、「このような重要な問題を決めるのはあなた自身の気持です、いいですか、あなた自身の気持だけですよ。……愛情もなく身を縛られること、ひとりの人に身を縛られながら、別の人が好きになることの惨めさは、ほかに比べようもありません」[6]と、実現までには時が掛かりそうな二人の結婚に、よほどの慎重さが必要なことを諄々と説いている。

「私は誰でも、できれば一生に一度は恋をして結婚する権利があると考えます」[7]と、姉カサンドラ（Cassandra）宛の手紙の中で、恋愛をはっきり肯定してかかる作者であるが、姪に対する細々とした忠告からみると、彼女はかなり冷静に現実を直視することができた女性のようである。「このあたりでは、皆とても貧しくて始末屋なので我慢がなりません――ケントこそ幸せを味わえる唯一の土地です。そちらでは誰もが裕福です……。」[8]「あの方は随分健康そうです（遺産は健康にとてもためになる食べ物ですからね）、……。」[9]いかにも現実から眼をそらさないオースティンらしい言葉である。幸せな生活には、物的な裏付けが不可欠であることを心得ていた彼女は、したがって、幸せな結婚も、愛情だけで実現不可能なことを知っていた。

このように、彼女は常識の持主であった。そして、その常識の立場から、人間の誠実さ、善良さを勧め、小賢しい才よりも、本当の知恵を持つことの必要を説いた。本当の知恵とは、自分がかかわることを含めすべてのものごとを、距離をおいて眺め、冷静に判断する賢明さである。我々が作者の中に見出す均衡感覚はこの知恵が生み出したものである。そのような作者の人生に対する態度は、前述のような、時代を先取りする華々しい進歩性とは無縁の、極めて地味なものであったといえる。

五

健全な常識人であり、見事な均衡感覚の持主であった作者の眼には、ロンボーンやネザフィールドの人達、そして、彼等のとる行動のすべてが、どこか不自然であり、不合理であり、没常識的に映る。たとえば、作中において結ばれる四組の男女の中、ジェインとエリザベス達はともかく、あとの二組の結婚はまさに没常識的である。シャーロット・ルーカス（Charlotte Lucas）とコリンズ（Collins）とのあまりにも現実的、場当り的な結婚や、リディア

(Lydia) とウィッカムの無責任極まる結婚は、当然作者の批判の対象となる。また、およそ知性に欠け、感情にまかせて、騒々しくしゃべりたてるベネット夫人、階級的自負心の固りのようなキャサリン夫人、さらに、ベネット家に乗り込んで、ずうずうしくも娘達相手に嫁選びを始めるコリンズの、「妙に卑屈なところと尊大なところの入りまじった」(一巻・一三章) 態度などは、作者の笑いの恰好の餌食となっている。

こうした中で、ベネット氏一人が、作者と同じ場所から距離をおいて、この小世界の住人達の繰りひろげる愚行を、穏やかに笑いながら、だが、いささかあきれ顔に眺めているのが我々の注意をひく。彼が、若気のあやまちで、つい美しさにひかれて結婚したのが現在の妻、ベネット夫人だが、その愚かさ加減は今となってはどうしょうもない。その上、一人を除いて、いずれも頼りにならない娘達ばかり。そのような家族と長年顔を突き合わせてきたお陰で、彼は自分の周囲に起る何事をも、ディタッチメントの姿勢で眺めておれる知恵を身につけている。

この父親にとっての唯一の慰めは、陽気で、理知的なエリザベスの存在である。彼はこの次女の理解力には全幅の信頼を寄せている。そして、彼女の結婚のことについても、姉ジェインと違って、勝気で、行動的なこの娘なら、自分で判断し、決めてくれるだろうと信じて、何一つ口出しをせずに端から見守っている。ただその場合、世間のことに未経験な娘に彼が期待するのは、ものごとの判断には一つの姿勢が必要なことを知ってくれることである。それは、自己と判断の対象との間に一定の距離をおいた姿勢——父親自身、そして作者が身につけている姿勢である。こうした立場に立って始めて、ものごとの座標が見えてくる。ことに、それが自分にかかわる事柄であれば、その事柄とのかかりにおいて自分があるべき座標を定めるためには、なおのこととこの姿勢が必要である。

エリザベスがダーシーの愛を受け入れる決心をした時点で、ベネット氏はまだ彼についての詳細、ことにリディアとウィッカム——一度は自分を裏切った男——に対する彼の親切な行為については聞かされていない。だから、ダーシーから正式に彼女との結婚の承諾を求められたとき、彼は、娘の決心が相手の富にひかれてのものでないことをま

ず確める。[10] そしてそのあと、彼女に極めて適切な忠告をあたえている。

……リジー、わたしはお前の性質をよく知っているよ。ほんとうに夫を尊敬するのでなければ、決して幸福にはなれないし、世間に対してちゃんとした顔もできない女だということはわかっている。つまり、夫が、自分よりも立派な人間だと思えなければだね。もし、釣り合わない結婚をすれば、お前の生き生きとした才能は、かえってお前をたいへんな危険に陥れるおそれがあるよ。世間の不信を買い、不幸に陥ることはまず逃れられないね。（三巻・一七章）

結婚に愛情が不可欠であるのはいうまでもない。彼女のダーシーに対する愛情が真剣なものであることも、父親には十分わかっている。だが、父親の気懸りは、勝気で、才気換発な娘のあるべき座標である。そして、それを彼女自身が気づいてくれることである。そうでなければ、娘の結婚が不幸なものになるのは必定である。自分が最も信頼し、愛しんできた娘だけに、慎重にならざるを得ない。

だが、彼の心配は杞憂であった。聡明な彼女は、父親の期待通り、自分の座標を見出していたのである。その過程は、途中に冷却期間をおいての長い試練であったが、持ち前の勝気さと陽気な性格のおかげで、賢明に、屈託なく乗り越える。こうして、彼女はついに「自己発見」を為し遂げたのである。

すでに見たように、エリザベスの「自己発見」は、その「偏見」による誤りからの脱出を可能にする。ただ、問題は、彼女の「偏見」が、彼女自身の性格によるよりも、むしろ周囲の事情――ダーシーの傲慢さ、彼の妨害による姉の結婚話の不調、ウィッカムの悪意に満ちた身の上話等――によることである。しかも、思いもかけぬ妹リディアの駈け落ち事件がその解決の糸口となる。このように、エリザベスを袋小路に追い込み、また、そこからの脱出を可能にする要因が外的事情であったことは、彼女の「自己発見」の本質を理解する上で注目すべき点であろう。

ダーシーも、彼女同様「自己発見」をする。そして変貌をとげる。おのれの自負心のゆえに無視してきた相手に対する愛情を自覚するにつれ、彼の内部に葛藤が生じる。その解決には、伯母キャサリン夫人の意地悪い妨害という外

的情況が、きっかけを与える。だが、彼の場合、そうして袋小路から脱出し、変貌をとげるまでに、自分の度し難いほどの高慢な性格を自己克服するという試練を経験しなければならない。いうなれば、彼の「自己発見」は、自分の性格の本質的なものを変える自己改造であった。

エリザベスも変貌する。しかし、ダーシーとは違って、彼女の場合、それは決して彼女の性格の本質にかかわる変化を意味しない。彼女にはダーシーのような自己克服が見られない。彼の出現が引き起した心中の波紋が静まったあと、彼女は依然として、勝気で、陽気な、「元のいたずらっ子」(三巻・十八章) のままである。ただ、彼女が父親の願い通り、人生の知恵——ものごとの座標を見出すための姿勢の必要を知ったことは、結婚の幸せとともに彼女にとって大きな収穫であった。結局、作者オースティンがエリザベスに求めた「自己発見」とは、このような自己観照の視点を見出すことであったといえるだろう。

註

(1) *Pride and Prejudice*, ed. R. W. Chapman, vol. II of *The Novels of Jane Austen* (London, Oxford University Press, 1976), I. i. ——以後テキストよりの引用文の箇所は本文中に記入し、註は省略。

(2) メアリアンは『分別と多感』(*Sense and Sensibility*, 1811) の女主人公。エマは『エマ』(*Emma*, 1815) の女主人公。

(3) Marilyn Butler, *Jane Austen and the War of Ideas* (Oxford, Clarendon Press, 1975), pp. 197–198. 参照。

(4) *Jane Austen's Letters*, ed. R. W. Chapman (Oxford, Oxford University Press, 1979), p. 408.

(5) *Letters*, p. 410.

(6) *Letters*, pp. 417–418.

(7) *Letters*, p. 240.

(8) *Letters*, p. 41.

(9) *Letters*, p. 188.

(10) 父親のこの懸念は無理からぬことで、事実、エリザベスは、ペンバリーの美しい館を訪れたとき、ふと「こんな邸の女主人

になるのも、まんざらではない！」（三巻・一章）と思った。また、後に、いつからダーシーに愛情を感じ始めたのかと姉から尋ねられて、たぶん彼の館を見た頃からだろう、と答えている。

――文学部教授――